

上野ナイトパーク構想報告

上野、つなぐ、未来。
～時間・空間を「つなぐ」ナイトパーク構想～



平成 31 年 2 月
東京文化資源会議



目 次

上野ナイトパーク構想全体図	1
I. 上野ナイトパーク構想策定の意義と社会的背景	2
II. 上野公園で実現すべき意義と期待される効用	2
III. 上野公園の現状.....	3
IV. 上野ナイトパーク構想の理念.....	4
V. 東京文化資源会議の役割	4
VI. 理念の具体化（骨子）	5
VII. 今後の取組	9
想定スケジュール.....	11
委員リスト	12

1964

東京オリンピック

高度経済成長型の日本

2020

東京オリンピック・パラリンピック

上野ナイトパーク構想

上野ナイトパーク構想の理念

- 新しい昼夜を通じた「カルチャーパーク」
- 昼から夜につなぐ新しい都市的生活を実現
- 昼夜を問わないアライバルシティ (arrival city)
- 防災の理念的拠点
- 少なくとも100億円の資金投入

理念の具体化（骨子）

- ① 上野公園の夜間屋外利用の活性化
- ② 各施設のユニークベニューとしての利用の拡充と多様化
- ③ 夜間屋外利用とユニークベニュー活用を可能にする施設・環境整備
- ④ 各施設の夜間一体運用によるサービス・運営の高度化・効率化
- ⑤ 特色ある周辺各文化資源エリアとの連携事業促進
- ⑥ 防災拠点としての意義
- ⑦ 民間主導の推進体制整備と規制緩和等制度整備

持続可能社会・成熟した市民社会としての日本

ダイバーシティの推進・保証 人種民族間交流
働き方改革 ナイトライフエコノミーの充実
文化資源の循環的活用 他
環境・文化・経済な持続可能性

上野ナイトパーク構想の概要

Ⅰ. 上野ナイトパーク構想策定の意義と社会的背景

1964年東京オリンピックが、高度経済成長に象徴される日本社会発展の出発点となったように、2020年の東京オリンピック・パラリンピックは日本の社会が次のステージに向けて転換する大きな契機になることが期待されている。しかしそうした大きな転換期にもかかわらず、その方向性を示すべき理念はまだ十分国民に提示されているわけではない。

多くの識者はこの転換期に「持続可能社会」及び「成熟した市民社会」の実現が必要であると指摘する。ダイバーシティの保証・民族間交流・働き方改革・ナイトライフエコノミーの充実、文化資源の循環的活用などによる新たな成熟型社会を、環境・文化・経済の三面性を保障しながら持続可能性を持って実現していく必要がある。

ここに共通する重要な要素として「文化及び文化資源」があり、「上野ナイトパーク構想」とは、ひと言でいえば、上野公園及びその周りの地域に豊富に蓄積された文化資源を、昼間のみならず、夜間を含めて活用することによって、環境・文化・経済をつなぎ、新しい生活スタイル・人々の多様性（ダイバーシティ）をつなぎ、日本の来るべき持続可能な成熟社会の見本を国内外に向けて示そうとする構想である。

Ⅱ. 上野公園で実現すべき意義と期待される効用

上野公園はもともと自然公園として設計されたものではない。江戸時代も明治時代も、時の政権の政策を文化・娯楽を通して国民に浸透させるための象徴的な場所、いわば国家が保障する一年中楽しめる空間「カルチャーパーク」として位置づけられてきた。このカルチャーパークの思想が、上野の山の起伏、寛永寺以来の花と緑、不忍池の水といった人工的自然環境の保持や、博覧会事務局以来のミュージアム、コンサートホール等文化施設の集中につながり、江戸・東京を象徴する文化資源を有することにつながっているのである。しかし、それらの文化資源は、現状ではほとんど昼間にしか活用されておらず、その潜在的な可能性の一部しか使われていない。

一方、もうひとつ上野公園がもつ重要な意義がある。それは「上野」という磁場の独自性である。上野から神田、湯島、本郷、秋葉原へかけての地域が近代から現代まで歴史的に果たしてきた「アライバルシティ (arrival city)」としての役割である。戦後からしばらくの間の東北・東日本から多くの若者が夜行列車に乗って到着した上野駅に象徴されるが、戦前はアジアの留学生が、そして現在もアメ横・御徒町周辺に代表されるようにアジア各国からの多くの働き手を違和感なく受け入れる街として続いている。現代の世界的な都市間競争において、アライバ

ルシティの機能は大いに注目されており、日本の最大の玄関口である成田空港に着いた訪問客を昼夜 24 時間受け入れることができる上野駅と周辺施設の充実が、わが国におけるこれからの代表的アライバルシティとして求められている。

東京がこれから世界の主要都市に伍していくために、夜の文化的生活も楽しむこと（夜遊びの楽しさ）ができる上野公園と、国内外の人々を 24 時間受け入れられる上野駅および上野周辺地域の存在は、わが国において先導的な役割を担うことになるだろう。

さらに、オリンピック・パラリンピック開催時に 10 年を迎える東日本大震災についても、東北に向けた首都東京の窓としての上野の立場からの、これからの防災に関わるメッセージの発信が求められる。

以上を通じて、上野ナイトパーク構想の実現により、日本の来るべき持続可能な成熟社会の第一歩を踏み出すのである。

III. 上野公園の現状

上記のような社会的背景と潜在的文化力がありながら、現在の上野公園は以下の三つの分断によって、その本来の力量・新しい理念が提示できていない。

① 公園内文化施設・敷地の分断

各施設の設置・運営者がまちまちで、本来必要である連携が取れていない。その象徴が不忍池であり、戦前まであった周回性が、公園側・動物園側に分断されたままで、それを何とかつなげようとする動きもない。

② 豊かな歴史性と多様な周辺地域との近接性の分断

上野公園内のミュージアム群を鑑賞する行動と、江戸時代は有機的につながっていた谷根千、湯島、本郷、上野広小路・御徒町、秋葉原、下谷など周辺地域における散策・娯楽的行動が切断され、かつての文化的伝統・連続性を意識することができない。

③ 昼間と夜間が分断：昼間の喧騒と夜の閑散さ・暗さ

近年各施設における夜間開館増加の努力はあるが、従来の経営資源（予算、人員等）では限界があり、昼間の喧騒に比べて、同じ文化資源がありながら、夜間のほとんどは活用されることなく眠っている。このままでは訪日外国人が政府目標の 6 千万人になった時の施設の受け皿がない。

こうした分断を融合する試みが「上野ナイトパーク」なのである。

IV. 上野ナイトパーク構想の理念

こうした状況を受けて、本会議はその解決に向けた理念として上野公園および上野地域について以下を提言する。

A) 新しい昼夜を通じた「カルチャーパーク」としての上野公園の再生

ハイ・カルチャー版の「カルチャーパーク」として、文化・環境・経済の一体性を、昼夜間通じて愉しむことができる観光立国の拠点としての上野公園を再生する。夜間の活用は昼間の公園・諸施設の価値も高める。

B) 昼から夜につなぐ新しい都市的生活を実現する空間としての上野公園の提示

都市の屋外を愉しむ生活、歩く・学ぶ・観る・想う場、昼と夜がつながる（ナイトライフの創造）、人種や世代がつながる、周辺地域のユニークな文化資源がつながる、新しい都市的生活を実現する空間としての上野公園を提示する。

C) 昼夜を問わないアライバルシティ（arrival city）としての上野の再生

訪日者の成田空港から上野への移動に着目し、国内外からの多種多様な人たちを 24 時間受け入れる上野駅・上野公園の中心的役割と個性豊かな周辺地域（それぞれの個性・民族性に合わせた居心地のいい場所を見つけられる）との接続拠点として当該地域を位置づける。トーキョートラムタウン（TTT）構想における「浅草・上野・秋葉原・東京・日比谷ルート」の拠点ともなる。

D) 東日本に向けた窓：東日本大震災 10 周年に向かって防災の理念的拠点に。

E) 少なくとも 100 億円の資金投入を！

江戸時代・明治時代における国家の威信をかけた資金投入と比べ、現在の上野公園・上野地域への国家的資金投入は非常に少ない。観光立国を前提として、出国税による税収の一部を投入する。

V. 東京文化資源会議の役割

東京文化資源会議は、日本全体の文化資源の活性化を視野に、先ずその対象として、江戸時代以来現代までの多種多様な文化資源が蓄積され、日々生成されている千代田区・文京区・台東区の 3 区を中心とした範囲を「東京文化資源区」と名付け、それら文化資源を再発見・活用・連携するための活動を開始した（2015 年 4 月～）。そして、その当初から意識したのが東北地方との繋がりであり、その接点としての上野であった。

当会議では、東京文化資源区の有する文化資源のユニークさや地域の特殊性に応じて、その活

用促進を図る各種プロジェクトを発足させてきた。その中には、湯島神田地域の学術・宗教施設の連携を図る「湯島神田社寺会堂検討会」、本郷にある建物や生活空間の記録と保全を考える「本郷のキオクの未来プロジェクト」、アニメ・マンガ・ゲームのまちとしてのアキバの次の時代を提案しようとする「広域秋葉原作戦会議」、上野公園南側の湯島・上野広小路・御徒町という言わば上野ダウンタウンの可能性を探る「上野スクエア構想検討委員会」、街づくりを担う人材養成の在り方を実践・検証する「プロジェクトスクール@谷中」など様々なプロジェクトがあり、それらは上野公園を取り囲むように存在する。特に「上野スクエア構想」は、北側の上野公園の構想とセットになってこそ、その価値が生きてくる構造になっている。実際に、その両者をつなぐプランとしての「グレイター上野駅構想」（後述）も会議内で浮上してきた。

このように、東京文化資源区構想にとって、上野公園という場とそれが有する文化資源（公園、各施設、収蔵品など）は、その周辺の地域と文化資源を繋ぐ中心的位置にあり、その在り方を考えることは、東京文化資源区構想実現に向けて本質的な意味をもつ。このような考えに基づいて、「上野ナイトパーク構想会議（座長：青柳正規山梨県立美術館長）」が発足した（2018年10月～12月）。

VI. 理念の具体化（骨子）

上野公園における文化資源活用の大きな課題に、公園及び諸施設の運営が国、都、民間など多くの機関に分かれ統合的運用が難しいこと、公園を含む文化資源が夜間ほとんど活用されていないこと、周辺の特徴ある文化資源地域との連携が十分とられていないことなどが挙げられる。逆に言えば、周辺地域と連携した公園内文化資源の夜間の統合的運用を可能にする方策を考えることが、当会議として取り組む重要課題となった。

それら解決策は以下の7分野（各項目で取り上げた方策はあくまで一例）である。

① 上野公園の夜間屋外利用の活性化

上野公園は、一般的な公園と異なり、その成立は江戸時代政権中枢の政治的・文化的・社会的背景をもとに成立しており、寛永寺との歴史的関係や、その後の明治政府以降の政策的な位置づけを十分考慮する必要がある。そのうえで、現在はほとんど眠っている公園の夜間利用の日常的活性化を図る。

- 野外演奏会・演劇・朗読会・上映会、グランピング等の実施
- 夜市の開催と屋台・キッチンカー設置
- 電気を使わないライトアート、ランタン等を活用した周辺地域との動線確保

- 歴史と文化を背景にした大夜会の開催（cf.京都岡崎における明治酒場の開催 2018 年 10 月 26 日）
- 不忍池の周回性の確保：公園/動物園を隔てているフェンスの撤去
- 夜行性動物展示の拡大と将来の在り方についての本格的検討（動物園）



グランピングの実施や夜市の開催、屋台・キッチンカーの設置

② 各施設のユニークベニューとしての利用の拡充と多様化（コンテンツの充実）

上野公園内の多くの博物館・美術館等の施設においては、海外ミュージアム等に比べて、せつかくのユニークベニューとしての活用が不十分であり、海外で可能なことがなぜ日本でできないか、ひとつずつ問題点を挙げながら、規則改正や運営方式の変更、要員手当、資金確保を含めて対策を考える。

- ディナーイベント、結婚式、企業・団体セレモニー、ファッションショー等の屋内外での実施
- 演奏会・演劇等の屋内外実施
- 子どもを対象としたお泊り会開催（すでに多くの国内公共図書館で実施済み）
- 施設利用手続きの簡素化・共通化と通年受付



ディナーイベント、結婚式等の実施

③ 夜間屋外利用とユニークベニュー活用を可能にする施設・環境整備

現在のままでは使い勝手が悪い諸設備・施設の一部改修を含めたハード面の整備が不可欠であり、新しい工法・機械設備や ICT を利用した実験的な試みも行う。また、公園内はインフラとなる電気・通信等設備の新たな整備も必要である。

- 電気・通信・水道等インフラ整備
- 利用しやすくするための各施設の設備改修・照明等の新設
- ホテル機能を持ち、来園者の交流の場となる運営施設「上野倶楽部ハウス（仮称）」の公園内設置
- 公園内に移動可能な、ガラス張りで見えるイベントスペースの設置（音楽会や芝居などの開催）
- ロボート（Roboat）による不忍池のイベント開催と日常的な水面清掃
- コンクリートの地面が多すぎるため、緑や土の部分を増設
- 桜の時期だけでなく、一年を通して昼夜を通じて花見や月見を楽しめる景観形成



公園内にガラス張りの演奏スペースの設置、「Roboat」による不忍池のイベント・清掃等

④ 各施設の夜間一体運用によるサービス・運営の高度化・効率化

昼間の運営一体化は、各施設・公園の運営主体が異なるため、障壁となる事項が多いが、現在ほとんど使われていない夜間及びネット上の運営一体化は比較的容易であろう。まずは実行できる事業・施設から始める。

- 上野全体の状況を把握している上野コンシェルジュの設置（上野公園内及び周辺施設）とチケット一括手配サービスの実施
- 各施設ウェブサイトとリンクを張ったポータルサイトの立ち上げ
- 公園・複数施設間を巡り公園内イベントに参加するナイトツーリズムの実施
- それらを担う運営企画会社の設立

⑤ 特色ある周辺各文化資源エリア（谷根千、下谷・根岸、湯島、本郷、御徒町、秋葉原等）との連携事業促進

東京文化資源会議や関連文化団体、企業等による活動実績がすでにある地域活動と連携した各種企画の実施を通じて、上野公園と周辺地域の文化的つながりを回復していく。また、そうした活動を通じて、各団体・施設・企業の企画運営スタッフ間の交流を深める。

- 東京文化資源会議の関連プロジェクト（V参照）及び東京ビエンナーレ構想との連動
- 周辺地域との連続性を意識したエッジデザインの実現
- 公園内諸施設が保有する美術品（レプリカを含む）の周辺施設へのリース
- 周辺地域の施設活用（復興小学校、中小空きビルなど）を含む、上野公園と周辺地域をセットにした各種ナイトツアーの実施
- グレーター上野駅構想（上野駅・御徒町駅の一体化をめざすハイラインの設置と湯島駅を含む駅間地下空間ネットワーク＝ローラインの形成、トーキョートラムタウン構想における浅草・上野・秋葉原・東京間のトラム敷設等によるスローモビリティの提案との連動など）の企画



グレーター上野駅構想、美術品の地域周辺エリア・施設へのリース事業

⑥ 防災拠点としての意義

東北への窓という歴史的 위치에鑑みて、東日本大震災を教訓に、これからの防災を考える拠点としての活動を上野公園内の各施設が連携して行う。周辺地域においても、コミュニティレベルでの防災ネットワークを構築し、上野公園がセンター的な役割を担う。多くの防災関連研究スタッフを擁する近隣の東京大学も協力体制を構築する。

⑦ 民間主導の推進体制整備と規制緩和等制度改革

①～⑥を実現するためには、個別の運営主体のアドホックな協力提携では困難で、民間主

体の運営組織の立上げが不可欠であり、それを支える産官学民の連携も必要である。また、現在の運営規則や法律内でも実現できることは多くあると考えられるが、より積極的な展開を図るためには規制緩和、予算措置等政府等による政策的・制度的な対応が求められる。

- 文化的コミュニティ活動の組織化（学生、地域住民、事業者等による）、周辺地域団体の緩やかな連携組織形成
- 中間法人、企画会社等の設立
- 構想実現の障害となる規制・制度の洗い出し
- 顧客設定と提供サービスの明確化：外国からのリピーターの獲得
- 収益事業の企画開発とそのための投資

①～⑦の活動を実施していく中で、いつ来ても上野公園とその施設が、365 日夜間利用可能な環境が整うと言えよう。2020 年オリンピック開催年は、その成果を最初に国内外に提示する絶好の機会であり、実施を義務付けられているオリンピック・パラリンピック文化プログラムの代表的な事例とすることができるだろう。その象徴として、同じ 2020 年開催が想定されている日本博に合わせて、上野駅を中心に昼夜を通じた文化的イベントを実施する。

また、上野ナイトパーク構想と上野スクエア構想、及び周辺地域の文化資源活用プロジェクトも包括する、歴史的かつ今日的なアライバルシティとしての上野に着目した「上野グランドデザイン計画（仮称）」の策定も今後必要になってくるだろう。

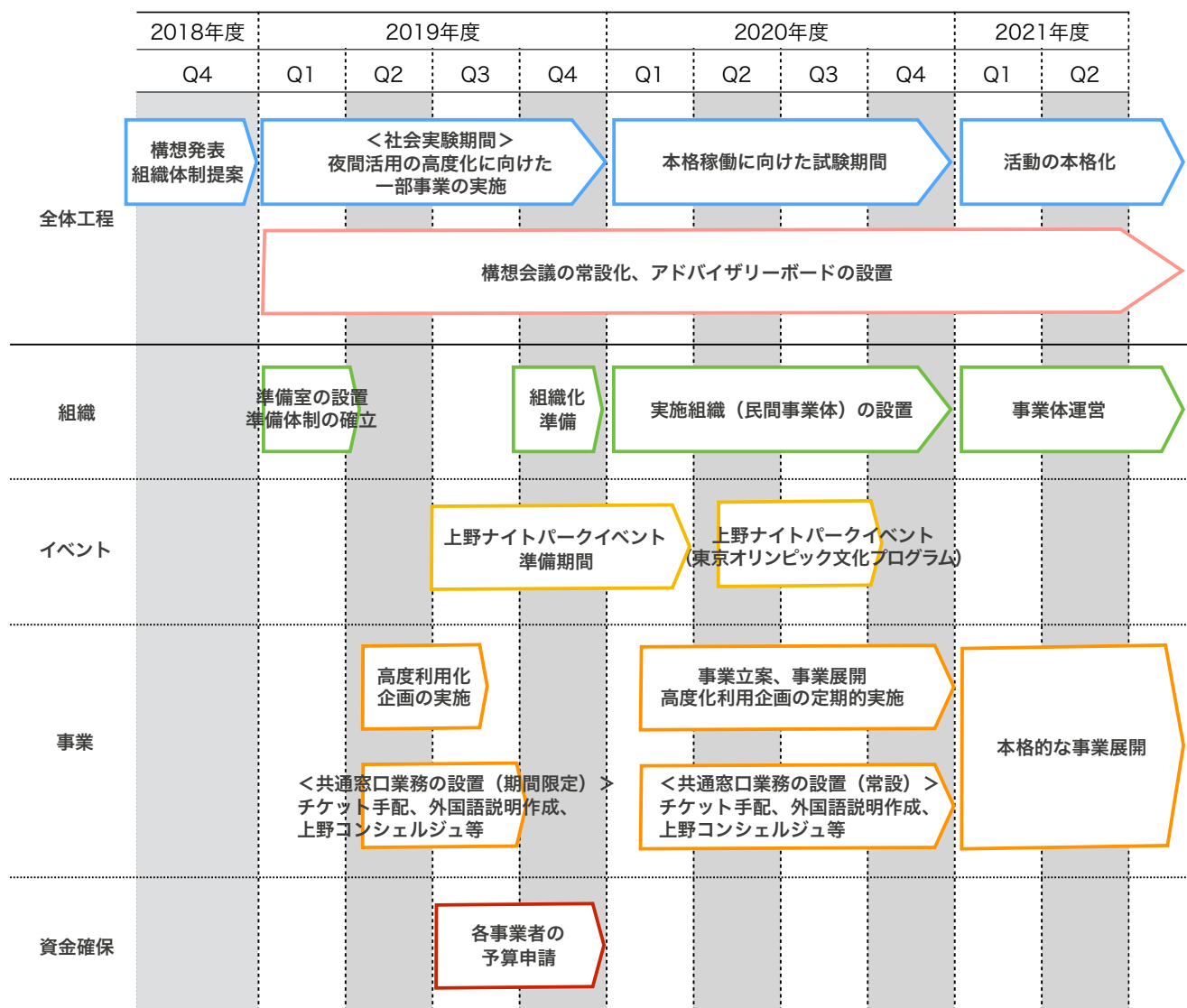
VII. 今後の取組

本構想の実現には、国、都を始め、企業や民間関連団体等による産官学民横断の取組が不可欠であるが、東京文化資源会議としては、主に下記の取組を行うことによって、諸機関・団体の連携役を果たしていく。

- ① 必要な調査を行なったうえで、関連規制等の整理を含む上野ナイトパーク構想の具体化計画・スケジュール案を作成する。
- ② 特定施設・特定期間を対象とする社会実験として予算確保のうえ、VI①～⑥で挙げた一部事業を実施する（2019 年）。また、2020 年の日本博開催に合わせた上野ナイトパークイベントを、東京オリンピック文化プログラムの一環として一定期間（一か月間を目標）実施するための準備を始める。
- ③ 関係者・関係機関への説明・意見交換等を始める。また、事業に必要な資金確保（公費投入、社会貢献事業、収益事業等）の目途をつける。

- ④ 本構想会議は構想実現に向けての常設諮問会議とし、その進捗状況のレビューを行う。
- ⑤ 公園内施設運営の一部共通化（各施設チケット手配、外国語共通仕様説明板作成、上野コンシェルジュ設置等）を実施するために、民間主体の実施組織を設置する。
- ⑥ 関連プロジェクトとも連携し、グレイター上野駅構想検討グループを設置する。

想定スケジュール



「上野ナイトパーク構想会議」委員リスト

青柳 正規	(東京大学名誉教授・山梨県立美術館長)：座長
岡室 美奈子	(早稲田大学教授・演劇博物館館長)
隈 研吾	(東京大学教授・建築家)
小泉 秀樹	(東京大学教授)
小林 正美	(明治大学副学長・教授)
デービッド アトキンソン	(株)小西美術工藝社代表取締役社長)
廣瀬 通孝	(東京大学教授)
増田 寛也	(株)野村総合研究所顧問)
南 学	(東洋大学客員教授)
村井 良子	(プランニング・ラボ代表取締役)
吉見 俊哉	(東京大学教授)

(敬称略・50音順)

東京文化資源会議

<http://tcha.jp>

〒101-0054 千代田区神田錦町2-1

TEL : 03-5244-5450

FAX: 03-5244-5452

e-mail info@tcha.jp